

私たちは、それを意識するかしらないか、好きかいやかにかかわらず、「社会」の中で生きている。「社会」とは何かについてはあまりにもさまざまな議論があるが、ここでは簡略に、「人々の相互作用から生み出され、逆に人々の相互作用を生み出す、行為と意味の選択肢の全体集合」と考えることにする。

私たちがどうふるまい、何を考えるかは、「社会」の中に散らばる選択肢の構造によって水路づけられている。「社会」全体の中には、いくつもの別々の部分——「経済」「政治」「教育」といった特定の意味のかたまり——があり、個人の立場やもっている資源によって、見える選択肢・選べる選択肢の範囲や内容には違いがある。さらに、さまざまな選択肢のどれを個人が選ぶかという確率が変わってくれば、選択肢の分布構造は時間とともに変化するし、新たな選択肢が生み出されたりもする。

しかも、個人——そこには社会学者も含まれる——にとって、選択肢の分布構造のすべてを、はっきりと見渡すことはできない。だから、何かの出来事や個人の行為は、表面的な現象としては、偶然に起こっていたり、例外的なことのように見えたりする。でも実際には、私たちはこうした「社会」から切り離されて、完全に「自由に」生きることは不可能なのだ。

社会学とは、このような「社会」の複雑なありようを、多様な角度から、多様な手法や理論・概念を使って、できる限り包括的に把握しようとする学問である。それはしばしば「謎解き」の形をとる。何が起きているのかを指摘し、その背景に何があるのか、人々にとっての選択肢の構造がどうなっているのかを、「社会」という観点から解明しようとするに、社会学の使命がある。

本書の目的は、このような社会学の考え方を、現代社会の諸事象に適用することにより、私たちが埋め込まれている「今」、すなわち私たちを取り囲む選択肢の布置状況やその変化について、理解を深めることにある。

現代社会とはいかなる社会なのかということについて、社会学はすでにさまざまな概念を使って論じてきた。ポスト近代化、リスク社会、個人化、グローバル化、新自由主義、管理社会……。これらについて解説した書籍や論文はす

でに数多くあるため、本書ではそれをなぞることはしない。ただ、これらの言葉が表現している「現代社会」の特徴を、ごくおおまかにまとめておけば、それは総じて、人々がばらばらで流動的になり、生活や仕事の不安定さや、厳しい競争や、冷酷な排除や、巧妙な飼いならしが、ますます強化されているような状況だといえるだろう。確かに、それらに当てはまるような事態はそこかしこで起きており、私たちの生活実感からしても、現代社会はこれらの諸概念で説明できてしまうように感じられるかもしれない。

でも、本書が試みたいのは、何らかの大きな概念で現代社会を説明することではなく、今の社会に生きる人々に覆いかぶさっている選択肢の構造とその変化の一端を、できるだけきめ細かくすくいとることである。もちろん、本書で取り上げることができているテーマはごく限られており、また多様な人々の個別の「生」に寄り添うには、私たちが使っているデータ・資料は粗すぎる網であろうという不安はある。しかしそれでも、本書が、時に私たちを閉じ込めているように感じられる選択肢の偶然性や不合理さへの気づきや、新たなよりよい選択肢を作り出すことに、少しでもつながってほしい、と思う。

そして、そのような営みこそが、社会学をするということだと考える。「社会」の現実を、可能な限りさまざまな手段を通じて、可能な限りさまざまな角度から把握し、同時にそれらを見つめている自らの視線をも常に吟味し続け、「社会」と自分について「他の可能性」を不断探索していく営みが、社会学の核心である。読者のみなさんも、その終わりのなき作業に加わってくれるとうれしい。

2015年5月

本田 由紀

本田 由紀 (ほんだ ゆき)

編者, 第 1, 8 章

現在, 東京大学大学院教育学研究科教授

〈主要著作〉『多元化する「能力」と日本社会——ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT 出版, 2005 年。『社会を結びなおす——教育・仕事・家族の連携へ』岩波ブックレット, 2014 年。

堤 孝晃 (つつみ たかあき)

第 2 章

現在, 東京成徳大学人文学部准教授

〈主要著作〉「『能力観』の区別から普遍性を問い直す——教師の『学力観』を参照点として」本田由紀編『労働再審① 転換期の労働と〈能力〉』大月書店, 2010 年。(山口毅と共著)「教育と生存権の境界問題」広田照幸・宮寺晃夫編『教育システムと社会——その理論的検討』世織書房, 2014 年。

中川 宗人 (なかがわ むねと)

第 3 章

現在, 東京大学社会科学研究所特任研究員

〈主要著作〉「会社と個人の関係をめぐる反省——1970~2000 年代の『会社人間論』に着目して」『年報社会学論集』24, 2011 年。「学歴主義の戦前と戦後」橋本健二編『戦後日本社会の誕生』弘文堂, 2015 年。

鈴木 翔 (すずき しょう)

第 4 章

現在, 秋田大学大学院理工学研究科助教

〈主要著作〉『教室内 (スクール) カースト』光文社新書, 2012 年。「なぜいじめは止められないのか? ——中高生の社会的勢力の構造に着目して」『教育社会学研究』96, 2015 年。

久保田裕之 (くぼた ひろゆき)

第 5 章

現在, 日本大学文理学部社会学科准教授

〈主要著作〉『他人と暮らす若者たち』集英社新書, 2009 年。「若者の自立/自律と共同性の創造——シェアハウジング」牟田和恵編『家族を超える社会学』新曜社, 2009 年。

御旅屋 達 (おたや さとし)

第6章

現在, 東京大学社会科学研究所助教

〈主要著作〉 (喜始宣照・堀有喜衣・筒井美紀と共著) 「横浜市の就労支援政策」筒井美紀・櫻井純理・本田由紀編『就労支援を問い直す——自治体と地域の取り組み』勁草書房, 2014年。「子ども・若者をめぐる社会問題としての『居場所のなさ』——新聞記事における『居場所』言説の分析から」『年報社会学論集』25, 2012年。

相良 翔 (さがら しょう)

第7章

現在, 埼玉県立大学保健医療福祉学部社会福祉子ども学科助教

〈主要著作〉 「ダルクにおける薬物依存からの回復に関する社会学的考察——『今日一日』に焦点をおいて」『福祉社会学研究』10, 2013年。「薬物依存からの『回復』に向けた契機としての『スリップ』——ダルク在所者へのインタビュー調査から」『保健医療社会学』25 (2), 2015年。

# 目次

はしがき	i
執筆者紹介	iii

## CHAPTER 1

### 言 説 1

現代社会を映し出す鏡

- 1 「格差」の中での「負け組」 ..... 2  
「格差」というキーワード (2) 何をめぐる「格差」か (3) 「親密さ」の貧困 (5) 「身近な人たち」の重要性 (7)
- 2 絡まり合うリアルとバーチャル ..... 8  
インターネットの帝国 (8) 現実の〈多孔化〉(11) 二次元という「癒し」(12)
- 3 「何か」への憎悪 ..... 15  
宛先を求めてさまよう不全感 (15) 攻撃の自己目的化 (17)
- 4 不可視な「社会」と自分——「陳腐さ」という悲劇 ..... 20

Column ① 〈虚構の現実化〉と〈現実の虚構化〉 14

## CHAPTER 2

### 能 力 25

不完全な学歴社会に見る個人と社会

- 1 事件の責任は誰にあったのか? ..... 26  
事件のあらまし (26) 責任の所在をめぐる4つの立場 (26) 議論の構造 (28)
- 2 能力主義と学校教育——学歴社会の正しさ ..... 30  
能力主義という近代社会の理想 (30) 学校教育の機能：社会化／選抜・配分 (31) 理想的な「学歴社会」(32)
- 3 適正な選抜・配分の不可能性 ..... 33  
筆記試験の公平さ (33) 不正防止の難しさ (34) 正確な測定の不可能性 (34) 測定すべき「能力」の内容 (35) 公平性と内容のトレードオフ (38)
- 4 適正な社会化の不可能性 ..... 41

親負担主義 (41) 18歳主義 (43) 卒業主義 (44) Xの置かれた  
日本の環境 (45)

- 5 事件の責任は誰にあるか／あるべきか? ..... 45  
因果関係と責任 (46) 責任と「能力」(47) 「能力」概念の曖昧  
さ (48) 「能力」の評価でつながる人間と社会 (50) 「あなたの  
社会」を考える (51)

Column ② 「能力」と遺伝の関係 48

CHAPTER  
3

仕事

53

組織と個人の関係から考える

- 1 組織社会の誕生 ..... 55  
自由な個人としての私たち (55) 組織社会としての現代社会  
(56) 組織社会以前の仕事 (57) 組織社会以降の仕事 (57)
- 2 組織とは何だろうか? ..... 59  
公式組織／非公式組織の成り立ち (59) 成員資格の形成 (60)  
成員資格のメカニズムと組織の力 (60) 個人の自由と労働市場の  
条件 (61) 組織を考える視点から、日本の雇用システムを考える  
視点へ (62)
- 3 日本の雇用システムとは何だろうか? ..... 63  
日本の雇用システムとは (63) 日本の特異性はどこにあるか?  
(63) 会社身分制としての日本の雇用システム (66)
- 4 日本の雇用システムのゆらぎ ..... 67  
未曾有の不況 (67) 組織の外部への排除：無業者層の増加 (68)  
組織の周辺への分断：雇用の多様化・非正規化 (70) 組織の内  
部：雇用の劣化 (71) 日本の組織社会の風景 (73)
- 5 会社と向き合うために ..... 73

Column ③ 「ブラック企業」問題 74

CHAPTER  
4

友だち

79

「友だち地獄」が生まれたわけ

- 1 「友だち」のあり方は社会的に規定される ..... 80  
中高生の「友だち」関係は変わってしまったのか? (80) 「友だ  
ち」が多い日本の若者 (81) 「友だち」は学校で作られる (82)

- ② 学校は「友だち」地獄を生み出す …………… 85  
 協調性が重視され、閉鎖性が高い学校空間（85）「優しい関係」  
 が生み出す「友だち地獄」（86）曖昧で不透明な「友だち」（88）
- ③ 学校がもたらす「友だち」関係の負の側面 …………… 89  
 学校の間人関係が生み出す「いじめ」と「スクールカースト」  
 （89）ヨコナラビの関係性からタテナラビの関係性へ（91）
- ④ 「自分らしさ」と複数の「キャラ」の両立 …………… 92  
 「自分」は複数あっていい（92）友人関係は演技によって維持さ  
 れている（93）タイムラインは「友だち」関係を変化させる  
 （94）
- ⑤ 答え合わせと解説 …………… 95
- ⑥ 友だちのルールは変えられる …………… 99

Column ④ 親しさをコントロールできる「友だち」 90

CHAPTER  
5

家 族

103

なぜ少子高齢社会が問題となるのか

- ① 「少子化」——減りゆく子どもと変わりゆく家族 …………… 104  
 社会問題としての「少子化」（104）未婚化・晩婚化とその背景  
 （107）少子化対策は結婚支援から？（109）
- ② 「婚活」——結婚はお金？それとも愛情？ …………… 111  
 日本における結婚の歴史（111）恋愛結婚の時代と「婚活」の台  
 頭（112）結婚の不安定化（115）
- ③ 「近代家族」——孤立する家族と子育ての困難 …………… 116  
 「近代家族」と家族の愛情（116）家族の孤立と「マイホーム主  
 義」（117）イクメンの理想と現実（118）子育ては誰の責務な  
 のか？（120）
- ④ 「家族難民」——家族を超えるセーフティネットは可能か？ …………… 120  
 家族からこぼれ落ちる人々（120）家族だけで高齢期を支えられ  
 るのか？（123）「家族からの疎外」と「家族への疎外」（124）  
 家族を超える共同生活の試み（125）
- ⑤ 子育てと共同生活の再編へ …………… 127

Column ⑤ ジェンダー 118

- 1 「どんな人にも「居場所」がある東京」 …………… 132  
東京には「居場所」がない!? (132) 「居場所」とは? (133)
- 2 「居場所のなさ」と生きづらさ …………… 134  
生き方の変化と「居場所」(135) 文化的目標化する「居場所」(136)
- 3 「居場所」化する社会 …………… 138  
職場という「居場所」(138) 自立支援化する「居場所」/「居場所」化する自立支援(140) 「居場所」化する社会運動/社会運動化する「居場所」(142)
- 4 地元は「居場所」の終着地点か? …………… 144  
空間性の差異の縮小と地元志向(144) 日本中が「居場所」になる(146) 地元つながりという財産(147)
- 5 「居場所がある」ことと「居場所がない」こと …………… 151

Column 6 人と人のつながりは個人の財産? 社会の財産? 150
-------------------------------------

- 1 「元犯罪者の社会復帰」から見る「社会」 …………… 156  
「社会」と「自分」のあり方を見つめるために(156) 「あした、どうしよう。あさって、どうしよう」の本当の底辺よりマシ?(156)
- 2 社会的なバリアの存在? —統計から見る「元犯罪者の社会復帰」… 159  
犯罪件数は増えている? 減っている?(159) 問題は再犯者!(161)
- 3 「元犯罪者の社会復帰」が成功するには何が必要か? …………… 162  
住居と就労(162) どうやって「犯罪者」になるのか?(165) どうやって「元犯罪者」になるのか?(166)
- 4 「元犯罪者の社会復帰」の現状 …………… 167  
元犯罪者の就労は困難か?(167) 元犯罪者はどんな仕事に就くのか?(169) 元犯罪者は他者とどのような関係になりやすいのか?(170)



- 5 「ふさわしい場所」で生きていく ..... 171  
 Xさんのその後(171) 元犯罪者の「ふさわしい場所」とは？  
 (173)

Column 7 デュルケムの犯罪観 158

8 保護観察制度 162

CHAPTER  
8

分 断

179

社会はどこに向かうのか

- 1 世界の中での日本 ..... 180  
 日本人々の閉塞感(180) 「失われた20年」(181)
- 2 独特な「近代化」プロセス ..... 182  
 「半圧縮近代」という経緯(182) 「戦後日本型循環モデル」の成  
 立・深化そして破綻(184)
- 3 世代間の価値観の接近, 現実の乖離 ..... 185  
 各世代が生きてきた時代(185) 自由と平等の実現に向かっている  
 のか?(186) 保守化する若者?(190)
- 4 世代を貫くさまざまな分断線 ..... 190  
 性別に囚われた人生(190) 男性の中で高まる無力感(192) 階  
 層と地域(193)
- 5 閉塞と分断を覆い隠す言葉 ..... 198
- 6 現在を超えて, その向こうへ ..... 200

Column 9 連鎖する貧困 197

事項索引 ..... 203

人名索引 ..... 208

本文イラスト：こびよ

## 言 説

## 現代社会を映し出す鏡

動機について申し上げます。一連の事件を起こす以前から、自分の人生は汚くて醜くて無惨であると感じていました。それは挽回の可能性が全くないとも認識していました。そして自殺という手段をもって社会から退場したいと思っていました。痛みを苦しむ回復の見込みのない病人を苦痛から解放させるために死なせることを安楽死と言います。自分に当てはめると、人生の駄目さに苦しみ挽回する見込みのない負け組の底辺が、苦痛から解放されたくて自殺しようとしていたというのが、適切な説明かと思います。自分はこれを「社会的安楽死」と命名していました。(中略)

いわゆる「負け組」に属する人間が、成功者に対する妬みを動機に犯罪に走るというタイプの事件は、ひょっとしたら今後の日本で頻発するかもしれません。グローバル経済体制の拡大により、一億総中流の意識が崩壊し、国民の間の格差が明確化して久しい昨今です。日本は東西冷戦下の高度成長期のようなケインズ型の経済政策を採用する体制にはもう戻れないでしょう。格差が開こうとも底辺がネトウヨ化しようとも、ネオリベ的な経済・社会政策は次々と施行されるのです。現在の刑事裁判で最も悪質な動機とされるのは利欲目的です。自分と致しましては、この裁判で検察に「成功者の足を引っ張ろうという動機は利欲目的と同等かそれ以上に悪質」という論理を用いて、自分を断罪して頂きたいのです。

(出所) 渡邊 (2014: 159, 168)。

この、自己否定と自己愛が絡み合っあふれ出しているような、異様な語り（＝「言説」）はいったい何だろう。そして、このような言説を生み出す現代社会とは、どのような空間なのだろうか。

冒頭の引用は、人気マンガ『黒子のバスケ』の作者の出身校やイベント会場、タイアップ商品を扱う店舗などに対して、2012年から2013年にかけて執拗に脅迫を繰り返していた犯人（ここでは“W”と呼ぶ）が、2013年12月に逮捕されたのちの初公判（2014年3月13日）で行った被告人意見陳述からの抜粋である。

もちろん、誰もがWのような事件を起こすわけではない。しかし、ある特異な事件を起こした者が自分と周囲をどのように考えるか、そして事件について述べる「動機の語彙」には、その人間が生活している「社会」のあり方が反映されている。だからこそ、1960年代の連続殺人犯の永山則夫、1980年代の連続幼女誘拐殺人犯の宮崎勤、2008年の秋葉原通り魔殺人犯の加藤智大<sup>ともひろ</sup>など、各時期の重大事件とその犯人像は、社会学の分析対象として、繰り返し取り上げられてきた（見田 2008、大澤 2008、中島 2011 など）。

なかでも、Wの饒舌な独白は、日本社会のさまざまな現実を多面的にすくいとして表現している点で、過去の大きな事件と並ぶ貴重な素材となる。それゆえ本章では、Wの言説という拡大鏡を通して、その向こうにある現代社会が、いかなる特徴を備えるにいたっているのかを読み解いてみたい。主な論点は、格差、親密性、リアル／バーチャル、憎悪、不可視性、である。

## 1 「格差」の中での「負け組」

### 「格差」というキーワード

冒頭の引用の中には、「格差」という言葉と、「負け組」という言葉が、それぞれ2回ずつ登場している。また引用した部分以外の陳述には、W自ら「自分はこの事件の犯罪類型を『人生格差犯罪』と命名していました」（渡邊 2014: 159）という文言もあり、「格差」という言葉は陳述全体で合計4回使われている。少なくともWの主観にとって、現代社会は「グローバル経済体制」や

#### keyword

**動機の語彙** アメリカの社会学者ライト・ミルズ（訳書 1971）の概念。人が自分の行動の動機を説明するとき、その説明は「真の動機」というよりも社会の中に流通している「それらしい動機」のメニューから選び取られる。

「ネオリベ的な経済・社会政策」によって「国民の間の格差が明確化」した社会であり、その中で W は自分を「負け組」であると認識していることは間違いない。「『黒子のバスケ』が自分の人生の駄目さを自分に突きつけて来る存在でしたので、それに自分が満足出来るダメージを与えることで自分を罰する『何か』に一矢報いたかのような気分になりたかったのです」（同書：162）と考えたことが、犯行の直接の動機であると W は述懐している。

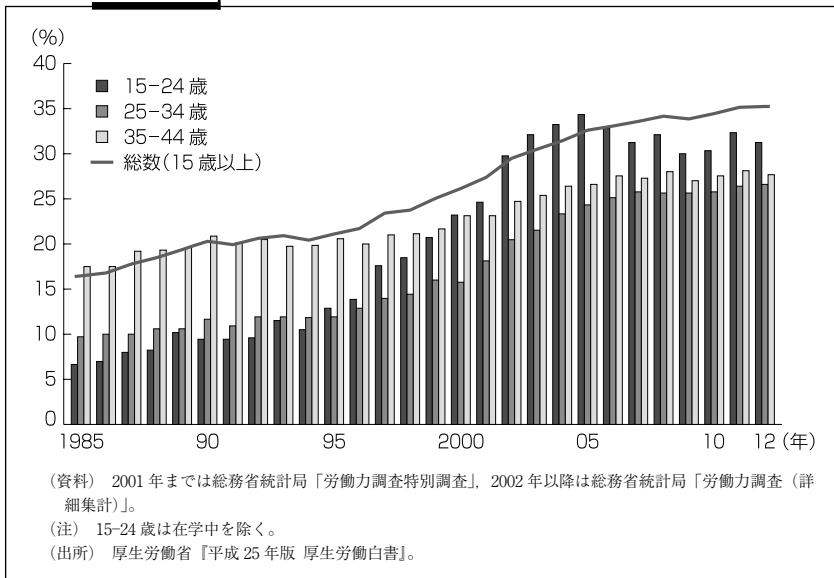
この「格差」というキーワードは、すでに1980年代から日本社会を記述する言葉としてしばしば用いられるようになっており、たとえば1985年刊の小沢雅子『新「階層消費」の時代——消費市場をとらえるニューコンセプト』（日本経済新聞社）は、「一億総中流社会」「平等社会」といわれていた戦後日本の終焉を指摘していた。しかし、「格差」の実感と言葉が日本社会に広がったのは、1990年代初頭にバブル経済が崩壊して以後の長期不況下、とくに90年代後半からである。所得格差、学力格差、地域格差などさまざまな事柄をめぐる「格差」の実態や要因を分析・議論する書籍・論文・記事が、前世紀末から今世紀はじめにかけておびただしく生み出されてきた。なかでも、2004年に刊行されベストセラーとなった山田昌弘『希望格差社会——「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』（筑摩書房）は、そのタイトルが示しているように、社会と自分に対する W の認識ときわめて重なる内容であった。

W は逮捕時の年齢が36歳であり、1977年生まれである。1997年から2007年にかけて、ちょうど「格差」問題が日本で非常な盛り上がりを見せていた時期が、W が20代の年齢であった時期と合致する。「格差」の中で自分が「負け組」であるという W の認識は、時代の言説状況から強烈に影響されていたことは容易に推測できる。

## 何をめぐる「格差」か

ただし、上記のように、「格差」といっても、何についての「格差」なのかは非常に多様でありうる。では、W にとっての「格差」の内実は何であったか。まず、W が収入や仕事といった物質的な生活基盤の面で、「格差」の下層に位置づいていたことが確認できる。W は陳述の中で、「自分のこれまでの人生での総収入額は1000万円に満たないです。年収が200万円を超えたことは

CHART 図 1.1 年齢階級別非正規雇用比率の推移



一度もありません。月収が20万円を超えたことも数回しかないです」(渡邊2014: 164-65)「そもそもまともに就職したことがなく、逮捕前の仕事も日雇い派遣でした」(同書: 170)と述べている。

周知のように、日本ではバブル経済の崩壊以降、景気低迷とデフレ経済の深化のもとで、所得水準の低下と雇用の非正規化が著しく進んだ(→第3章)。それ以前の日本では、非正規雇用は主婦パートや学生アルバイトなど、就労以外に主たる役割をもつ人々が補助的な収入を得るためのものであり、新規に教育機関を卒業した若者はずっとも正規雇用の職に就きやすい恵まれた層であった。しかし1990年代半ば以降、新規学卒者をはじめ若者の中にも、非正規雇用や失業・無業の状況にならざるをえない人々が増加した(図1.1)。彼らを言い表す「フリーター」や「ニート」という新造語は、そうした雇用構造の変容の原因を若者自身の就労意欲の低下などに求める議論の中で、盛んに使われていた。

非正規雇用はパート・アルバイト、派遣社員、契約社員など多様な形態をとるが、いずれも有期雇用で不安定であること、正規雇用に比べて賃金が低いこと、教育訓練機会も限定的であるためスキルを身につけにくいことなどが問題視されてきた。しかし、それとは逆に安定的で高賃金であるとされてきた正規

雇用も、とくに今世紀に入ってから、長時間労働や賃金水準の低下、職場におけるハラスメントなど、労働条件の劣悪化が指摘されるようになっていく。2010年頃から若者の間に普及し2013年には流行語大賞の1つにも選ばれた「ブラック企業」という言葉は、正規雇用の中にも過酷な働き方が広がっていることを象徴している。こうした非正規・正規いずれにも及ぶ労働市場の「荒れ」は、もはや「格差」とどまらず、時に生命の危機すらもたらす「貧困」の問題を顕在化させている。

このような、バブル経済後の「失われた20年間」に深刻化した仕事と収入の問題に、Wの経歴も直撃されている。2002年から2008年の「いざなぎ越え」と呼ばれる景気回復期に、Wはすでに20代後半であり、その頃の新規学卒者が享受していた就職機会の拡大の恩恵にはあずかれなかった。自分より数歳年下の年齢層が、就労に関してより有利だったことは、Wの不遇感を掻き立てる方向に作用していただろう。

すなわち、Wにとっての「格差」の中には、仕事や収入に関する側面が含まれていたことは確かであると考えられる。しかし、このことだけではWにとっての主観的な「格差」の一端しか説明したことにならない。Wの陳述全体の中で、こうした物質的な格差や困窮に触れられている部分はごく少なく、力点も置かれていない。では、それと同等か、おそらくそれ以上に、Wを苦しめWの「負け組」意識の根源となっていたのは、どのような「格差」か。

## 「親密さ」の貧困

本章冒頭の引用にあるように、Wは「自分の人生は汚くて醜くて無惨である」と感じていた。その理由についての説明が、以下の部分にある。

自分が初めて自殺を考え始めてから今年がちょうど30年目に当たります。小学校に入学して間もなく自殺することを考えました。原因は学校でのいじめです。自分はピカピカの1年生ではなくボロボロの1年生でした。この経緯についてここで申し上げても詮ないで、詳細については省略します。自分を罰し続けた何かとは、この時にいじめっ子とまともに対応してくれなかった両親や担任教師によって自分の心にはめられた枷のような

# 事項索引

(太字〔ボールド〕の数字書体は、本文中で **keyword** として表示されている語句の掲載ページを示す)

## ● あ 行

愛国心 189  
アイデンティティ 165, 166  
圧縮された近代 **106**, 183  
アニメ 13-15  
アノミー 137  
暗数 **34**, 121  
生きづらさ 134, 137  
生きる力 37, 38  
イクメン 118, 119  
いざなぎ越え 5, 190  
いじめ 81, **89**, 91, 92  
一億総中流社会 184  
逸脱 158, 165  
逸脱行動 137, 166  
遺伝の影響 48  
居場所 131-145, 147, 151  
ポータブルな—— 147  
——がない 133, 134, 137, 138  
——のなさ 133, 136, 137, 141, 150, 151  
居場所化 134, 138, 140, 142, 143  
居場所づくり 140  
因果関係 46, 48  
インターネット 8-12, 14-16, 80  
失われた20年 5, 182  
AO入試 39  
SNS 94, 95, 131, 133, 142  
OECD 43, 44  
追い出し部屋 139  
オタク 14, 15  
お見合い結婚 111, 112  
親の介護 123  
親負担主義 41

## ● か 行

解雇 54, 61  
——規制 73  
——撤回 54  
皆婚社会 112, 115  
会社組織 54-56, 66, 69, 73, 74  
会社人間 184, 187  
会社身分制 66-69, 71, 72  
階層 180, 193, 198  
出身—— 30, 32, 40, 48  
到達—— 30, 32, 48  
核家族 117, 121, 136  
格差 2, 3, 5, 17, 20  
学習指導要領 36  
隔離 172, 173  
学歴 **32**, 66, 67, 72, 182, 194-196  
学歴社会 29-33, 35, 41, 44, 45, 49  
過剰な敏感さ **88**, 95, 96  
家族 7, 170, 197  
——からの疎外 124  
——の孤立 118  
——への疎外 124  
家族難民 121  
学校 83-86  
学校教育 30-33, 41, 50  
——の社会化機能 31, 44, 45  
——の社会的機能 **31**  
——の選抜・配分機能 32, 33, 35, 39  
学校歴 **32**, 48  
感情 36  
完全失業率 **67**  
機会の平等 31, 48  
企業福祉 117, 120  
企業別組合 63, 67

帰属 46, 47  
規範 158  
キャラ 93, 95  
キャリア教育 199  
協調性 85, 86, 88, 92  
共同生活 112, 116, 124, 125, 127  
——実践 125, 126  
協力雇用主 164, 169  
虚構の現実化 14  
居住地域 194  
均質化したロードサイド文化 146  
勤続年数 64  
近代化 90, 105, 106, 112, 183  
近代家族 117, 120, 136  
近代社会 30, 31, 49, 90, 180  
空間 133, 134, 140, 147, 151  
クールジャパン 14  
『黒子のバスケ』 2, 3, 9, 13, 17, 19  
グローバル化 180  
ケア労働 117  
景気 62, 75, 114  
携帯電話 80  
刑法犯の認知件数 160, 161  
刑務所 172, 173  
刑務所出所者等総合的就労支援対策 164  
ゲゼルシャフト 90  
結婚 109, 111, 124  
ゲメインシャフト 90  
ゲーム 13, 14  
現実の虚構化 14  
現実の〈多孔化〉 11  
郊外化 146  
工業化 57, 66  
公共職業安定所(ハローワーク) 164  
合計特殊出生率 104-106, 183  
公式組織 59  
更生緊急保護対象者 164, 165  
更生保護施設 157, 163, 164, 169, 171, 174  
更生保護制度 162  
高度経済成長 112, 114, 117, 145, 186  
公平(性) 27, 28, 33, 38, 40

神戸市児童連続殺傷事件 137  
国民国家 183  
個人化された能力主義 17  
個人の自由 54, 61-63, 68, 75  
子育て 117, 124  
国公立大学 42, 43  
子ども中心主義 117  
子どもの貧困対策に関する大綱 198  
子どもの貧困対策の推進に関する法律  
198  
雇用 56, 123  
——の多様化 70, 71  
——の劣化 71  
コレクティブハウス 104, 125  
婚外子(率) 110  
婚活 113, 115, 124

## ● さ 行

再犯者 161  
再犯者率 161  
採用 37, 44, 61  
サウンド・デモ 142  
里親制度 126  
差別 54, 61, 62, 75  
産業化 117, 183  
三種の神器 63  
シェアハウス 125, 126  
ジェンダー 64-67, 71, 72, 118  
自己 93  
——の多元化 93, 96, 97  
自己コントロール権 94, 98  
自己実現 134  
失業 68  
指導監督 162  
児童虐待 121  
自分らしさ志向 93  
鳥宇宙 91  
地元 8, 133, 145, 147-151  
——志向 145, 147, 194  
——つながり文化 148



- 社会意識 186, 196  
 社会運動 134, 142-144  
   新しい—— 143  
 社会階層 193, 195, 196  
 社会関係資本(ソーシャル・キャピタル)  
   148, 150  
 社会参加 176  
 社会的機能 31-33  
   学校教育の—— 31  
 社会的強者 17  
 社会的弱者 17, 173  
 社会的ひきこもり 122  
 社会的役割 133, 139  
 社会保障(制度) 69, 120, 122, 184, 198  
 若年定年制 107  
 若年ホームレス 122  
 ジャスコ化 146  
 ジャパン・アズ・ナンバーワン 184  
 自由 30, 31, 43, 49, 61, 186, 190  
   ——な個人 55, 59  
 就学前教育 198  
 住居 162, 163  
 宗教的組織 61  
 就職 44  
 終身雇用(制度) 63, 138, 140  
 18歳主義 43  
 就労支援 140, 141, 162-165, 167, 198  
 出生力 104  
 趣味 133, 144  
   ——縁 144  
   ——集団 144  
 少子化 104-106, 109, 110, 120, 124, 195  
   ——対策 109, 110  
 少年犯罪 137  
 消費社会 145  
 職人 57  
 女性学 118  
 女性差別撤廃条約 107  
 女性ホームレス 122  
 自立 176  
 自立支援 140-142, 151, 157  
 私立大学 42, 43  
 新規学卒一括採用 45, 184  
 人口置換水準 105  
 人口転換  
   第1次—— 105  
   第2次—— 106  
 人口ピラミッド 105, 106  
 人物本位 38  
 親密性 94  
 親密な関係(性) 6-9, 20, 98, 149, 166  
 信頼性 35  
 推薦入試 39  
 スクールカースト 91, 92, 97, 98  
 ステイグマ 166, 167, 169, 170, 174  
 スマートフォン 10, 11  
 成員資格 60, 61  
   ——のメカニズム 60, 62  
 生活指導 86  
 生活保護 120, 122, 197  
 正規雇用 4, 165  
 制度的役割 94, 95, 98  
 性別賃金格差 66  
 性別役割分業(性分業) 113, 117, 120, 136,  
   184, 186, 189, 193  
 責任 26, 27, 46, 47  
 石油危機 136, 184, 186  
 セクシャル・ハラスメント 74  
 世襲制 30  
 世代 185, 186, 190  
 セルフヘルプグループ 176  
 前科(者) 167, 168, 170, 174  
 専業主婦 115, 117, 119, 135, 136  
 全国更生保護就労支援機構 164  
 戦後日本型循環モデル 184, 186, 187, 190,  
   191  
 憎悪 →ヘイト  
 相関関係 48  
 双生児研究 48  
 相対的貧困率 197  
 組織社会 54-62, 66, 68, 73  
 組織への参入/離脱 60, 61

組織目標 60  
卒業主義 44

## ● た 行

大学・社会制度 27-29, 41, 45  
大学の大衆化 42  
対人関係 36, 38, 133, 134  
对人的役割 94  
タイムライン 94  
妥当性 34, 35  
男女雇用機会均等法 107  
地位下降 180  
地域若者サポートステーション 140  
地位上昇 180, 182  
中央教育審議会 38, 40  
中間集団全体主義 89  
中世 30-32  
賃金格差 65, 71  
強い紐帯 148-150  
底辺 155, 158, 159, 166, 172, 175  
  本当の—— 155, 156, 166, 172, 175  
テスト理論 34  
動機の語彙 2  
登校拒否(不登校)問題 136  
同性婚 110  
同調圧力 88, 97  
同輩集団 89, 91, 116  
都市化 105, 117, 183  
友だち 7, 81, 88, 90  
  ——地獄 88, 89  
ドラマトゥルギー 93, 98  
トリレンマ 42

## ● な 行

二次元の世界 13-15  
日本の雇用慣行 37, 184, 199  
日本の雇用システム 54, 55, 62, 63, 66, 67,  
  70, 73, 74  
入試制度 27, 28, 35, 38, 39, 47

ネット右翼 17  
ネットカフェ難民 122  
年功賃金 63, 64, 66, 187  
能力 17, 30-33, 35, 47, 49, 50, 167, 169  
  ——の測定 33-35  
能力主義 30-33, 35, 39, 40, 43, 45, 48, 49

## ● は 行

廃棄 175  
排除 61, 68-70, 141, 151, 175  
場所 133, 134, 147, 151  
バーチャル 8, 9, 12, 14, 15, 20  
バッシング 15-18, 20  
パノプティコン 86  
バブル(経済)崩壊 4, 5, 16, 67, 135, 182,  
  184, 186, 187  
パワー・ハラスメント 74  
半圧縮近代 183, 184  
反(脱)原発デモ 142  
晩婚化 123  
犯罪 156, 158, 159, 165, 175  
犯罪白書 160, 163  
非公式組織 59  
非人格性 59, 60  
  (雇用の)非正規化 4, 70, 71  
非正規雇用 4, 71, 107, 139, 169, 173, 187,  
  192  
筆記試験 27, 28, 33-35, 37-40, 49  
ひとり親世帯 121  
評価 27-29, 33, 35, 36, 38, 40, 50  
平等 30-32, 43, 48, 186, 190  
開かれた自己準拠 93  
貧困 5, 173  
  女性の—— 122  
  ——の再生産 197  
ファスト風土化 146  
フィクション 13, 49  
夫婦別姓 111  
  選択的—— 111  
フェミニズム 118

不可視(性) 21  
不況 63, 67, 68, 70, 72-75  
ふさわしい場所 173-175  
ブラック企業 5, 74, 140, 192  
フリースクール 136  
フリーター 70  
ブルー・カラー(BC) 57, 58, 59, 65, 66  
文化的目標 137, 141  
分業 57-60  
分断 180, 185, 186, 191, 194, 198, 200  
分配原理 30  
ペアレントクラシシー 123  
閉鎖性 85, 86, 89, 90  
ヘイト(憎悪) 15, 17, 18, 20, 156, 198  
ヘイトスピーチ 15-17  
保育ママ 126  
ボエム化 199  
保護観察 162, 164, 165  
保守化 190  
没場所性 146  
補導援護 162  
ホームシェア 126  
ホワイト・カラー(WC) 58, 59, 65-67

## ● ま 行

マイホーム主義 118  
マイルドヤンキー 146  
負け組 2, 3, 5, 6, 8  
窓際族 140  
マンガ 13-15  
未婚化・晩婚化 107-109  
三菱樹脂・高野事件 54  
無業者(層) 68, 69  
若年—— 69

村社会 116  
無力感 181, 190, 192, 193  
命令体系 59, 60  
元犯罪者の社会復帰 156, 157, 159, 161-167, 176

## ● や 行

優しい関係 86, 87, 88, 95, 96  
有効求人倍率 67  
備兵部隊 61  
弱い紐帯 148, 150

## ● ら 行

ライフコース 106, 186  
リアル 8, 9, 11, 13, 15, 20  
離婚率 116  
流動性 140, 151  
ルサンチマン 18, 198  
レリバンス 17  
恋愛結婚 112, 115  
労働運動 144  
労働協約 73  
労働市場 61-63, 68, 75, 182, 191, 192  
労働市場政策 75  
積極的—— 75  
労働法制 73, 74

## ● わ 行

若者 8, 68, 69, 74, 84, 87, 93, 138, 140, 142, 144, 145, 184, 190  
若者自立支援 134, 140, 141

## ● あ行

阿久澤麻里子 17  
浅野智彦 93, 144  
東浩紀 146  
阿部彩 197  
阿部真大 149, 199  
新谷周平 148  
家入一真 131-134, 142, 144, 145  
一色清 27, 36  
上野千鶴子 90  
大沢真理 198  
太田聰一 147  
大平健 87  
奥山敏雄 59  
小沢雅子 3  
小田嶋隆 199  
落合恵美子 117

## ● か行

加藤智大 2, 12  
北田暁大 146  
吉川徹 196  
ギデنز, アンソニー 90  
久世律子 147  
グラノヴェター, マーク 148  
玄田有史 69  
ゴッフマン, アーヴィング 93  
児美川孝一郎 199  
今野晴貴 74

## ● さ行

下條信輔 35, 36

鈴木謙介 11, 94

須藤靖 27

## ● た行

高野達男 53-55, 67  
デュルケム, エミール 158, 159, 165  
テンニース, フェルディナント 90  
土井隆義 87, 88  
トゥーレーヌ, アラン 143

## ● な行

内藤朝雄 89  
永山則夫 2  
ニーチェ, フリードリヒ 18

## ● は行

ハーシ, トラビス 166  
パットナム, ロバート 150  
原田曜平 146  
フーコー, ミシェル 86  
古市憲寿 142  
ベッカー, ハワード 165  
ベンサム, ジェレミ 86  
本田由紀 28

## ● ま行

舛添要一 131  
マートン, ロバート・キング 137  
三浦展 146  
見田宗介 186, 187, 190  
道下裕史 71  
宮崎勤 2

宮台真司 14, 91, 124, 146  
ミルズ, ライト 2

● や 行

矢野真和 41

山田昌弘 3, 113, 115, 121

● ら 行

リン, ナン 150

レルフ, エドワード 146

◆ 編者紹介

ほん だ ゆ き  
本田由紀

現在 東京大学大学院教育学研究科教授

主著 『若者と仕事——「学校経由の就職」を超えて』東京大学出版会、2005年  
『多元化する「能力」と日本社会——ハイパー・メリトクラシー化のなか  
で』NTT出版、2005年

『「家庭教育」の隘路——子育てに強迫される母親たち』勁草書房、2008年

『軋む社会——教育・仕事・若者の現在』双風舎、2008年（のち河出文庫）

『教育の職業的意義』ちくま新書、2009年

『学校の「空気」』（若者の気分）岩波書店、2011年

『社会を結びなおす——教育・仕事・家族の連携へ』岩波ブックレット、  
2014年

『もじれる社会——戦後日本型循環モデルを超えて』ちくま新書、2014年



有斐閣 ストゥディア

YUHIKAKU

現代社会論——社会学で探る私たちの生き方

*Contemporary Society: Exploring Our Way of Living by Sociology*

2015年6月30日 初版第1刷発行

2017年1月20日 初版第2刷発行

編者 ほん だ ゆ き  
本田由紀

発行者 江 草 貞 治

発行所 株式 有 斐 閣  
会社

郵便番号 101-0051

東京都千代田区神田神保町2-17

電話(03)3264-1315〔編集〕

(03)3265-6811〔営業〕

<http://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷・株式会社理想社／製本・牧製本印刷株式会社

© 2015, Yuki Honda. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります。

ISBN 978-4-641-15018-8

**JCOPY** 本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、(社)出版者著作権管理機構(電話03-3513-6969, FAX03-3513-6979, e-mail:info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。